竹内けん
挿絵：金目鯛ぴんく
戦国
第3巻
艶武伝
～雷鳴の抄～
試し読み版

◆◇◆目次◆◇◆

第一章　うろんな者　004
第二章　城井谷騒動後記　044
第三章　雌伏　076
第四章　運命の歯車　137
第五章　関ヶ原の役　198
第六章　大垣城攻め　258

お珊（さん）

病弱で儚げな名門三村家のお姫様。勝成と結婚することとなる。

お登久（とく）

お珊お気に入りの侍女。無邪気で元気いっぱいな没落帰農した武家の娘。

戦国艶武伝 ～雷鳴の抄～

第3巻

瀬川菖蒲
切支丹女武者。処女も帰るところも失い勝成についてくる。
藤島蛍火
服部半蔵配下のくのいち。勝成に抱かれて女としても開花。
桜庭律子
若き日の勝成の愛妾だった武家の女性。
青木小葵
律子とともに若き日の勝成の愛妾だった刈谷城下の町娘。
水野藤十郎勝成
鬼日向とも称された猛将かつ水野家の嫡男。奔放な性格で戦好きの女好き。

第一章　うろんな者

「なんでおまえがついて来ているんだよ！」

天正十七年（１５８９）十一月二十五日、小西家を出奔した水野勝成に付き従うのは、庵原助右衛門、中川志摩之助、萩濃新右衛門、山瀬勘右衛門、山本左太夫、杉野数馬、近藤弥之助、林茂之助。それぞれの郎党あわせて二、三十人。そして、瀬川菖蒲であった。

だれが与えたのだか馬に跨った菖蒲は、鎧兜に身を包んでいる。凛々しい顔つきのため、美貌の若武者と見えないこともない。

愛馬「小鳥しろごま」の上から怒鳴りつける勝成に、菖蒲は平然と応じた。

「貴様には責任を取ってもらう」

「責任だぁ？　な、なんのことだ……⁉」

意外な言われように驚く勝成に、眼光で人を殺せそうな目つきで菖蒲は応じた。

「わたしは切支丹だといったはずだ。切支丹には離婚は許されない。わたしの貞操を奪った以上、貴様はわたしの夫だ」

その論理の飛躍ぶりに、さすがの勝成も慌てた。

「ちょ、ちょっとまて。戦場であーいうことはよくあることだろ。女は犬に噛まれたとでも思って忘れるのが常識ってものじゃないのか」
「貴様にだけは常識を説かれたくないわ！　しかし、わたしたちはもう結ばれた。この糸は決して切ることができぬ」
菖蒲は憎々しげに応じる。
「あのな……家に帰れよ。家族が待っているだろ」
「貴様のせいで我が一族は滅んだ。親も故郷も貞操も、人としての最低限の誇りも失った。いまさらいくあてなどあるものかっ！」
勝成の無神経極まる台詞に、女武者は硬質な美貌の下から嚇怒を溢れさせた。
「貴様のようなろくでなしは、必ず非業の死を遂げる。もはやわたしの望みは、貴様についていって、貴様がいかに惨めな最期を遂げるかを見届けることだけだ」
「なんだそりゃ⁉」
「貴様がどうしても連れてゆかぬというなら、やむを得ん。教義に反するが、喉を突くまでのこと。そして、幽鬼となって貴様に取りついてやる」
憤然と腰の短刀を抜いた菖蒲は、自らの喉に切っ先をあてがった。
「あぁ、わかった。わかったよ。連れていってやるから、その物騒なものをしまえ！」

自分の抱いた女に自殺されたのでは、さすがに目覚めが悪い。
「ただし、間違っても妻なんて名乗るなよ。女ではなく郎党として扱う。それでいいんだったらついて来い」
「よかろう。もとよりそのつもりだった。本日よりわたしは貴様の郎党に加わる」
菖蒲は短刀を鞘に戻した。
「まったく、開き直った女にはかなわねぇよ」
吐き捨てた勝成はジロリと、ふたりのやり取りをニヤニヤしながら見守っていた手下たちを睨む。
どうやら、勝成が菖蒲を受け入れるかどうか賭けをしていたようである。まったく、忠誠心に溢れた部下たちだ。

※

南肥後から北に向かって行けば、いやでも熊本へ出る。
かつては佐々成政の居城であった隈本城は、新領主加藤主計頭清正によって熊本城と改名されていた。
いささかややこしいが、豊臣秀吉の麾下には、加藤清正、加藤嘉明、加藤光泰という、加藤という姓の有力武将が三人もいる。これを俗に「三加藤」と呼ぶ。姓は同じだが、三

者に血縁関係はない。また、清正と嘉明のふたりを称して「両加藤」といういい方もある。嘉明、光泰のふたりが実力で成り上がったのに対して、清正は血縁での抜擢だ。

勝成は、佐々家時代の同僚やら、志岐・天草一揆の戦友やら、知り合いには事欠かないこともあって、堂々と城門で大音声をあげた。

「ただいま、小西摂津がところを去ってまいった水野六左衛門でござる。当家に仕官したいと思い推参した次第である。主計頭殿にお取次ぎ願いたい」

加藤清正が、小西行長に遠慮して召し抱えないなら、それでもいい。他の大名の下にいくだけだ。

「おお、六左衛門かよくきた」

出迎えてくれたのは、佐々家の旧臣大木兼能である。

この大木兼能は、若き日、伊勢一向一揆に参加していた。

伊勢一向一揆の最後は、織田信長に降伏を申し入れ、砦からでてきたところを、騙し討ちで皆殺しにされる。これに怒った一揆軍は捨て身の反撃を行なった。その中にいた大木兼能は、なんと織田信長の異母兄織田信広と一騎討ちをして討ち取ってしまう、という奇蹟の武功をあげている。その後、どういう経緯を辿ったのか不明だが、佐々成政に認められて三千石の重臣にまで成り上がった。そして、成政亡き後は、その勇名を知る加藤清正

に三千石の重臣として迎えられていたのだ。
まさに地獄を知る勇士であり、勝成としても敬意を払うに足る存在だった。
ついでにいえば彼の娘は、のちに佐々輝子（てるこ）の子・松原（まつばら）三郎四郎に嫁ぎ、佐々介三郎（すけさぶろう）を産む。
「いまさらだが、加藤家に俺の席はあるか？」
「安心しろ。加藤家の家臣団は驚くほどガバガバだ」
加藤清正は、この北肥後二十万石に配されるまでは三千石取りに過ぎなかった。その三千石にしても、賤ケ岳の七本槍という強引な箔付けでもらったものだ。それ以前はわずか百七十石取りであったという。
まさに異例の出世を遂げた秀吉の親族ならではの、異常な抜擢人事だ。
そのため致命的なまでに家臣が不足しており、それを補うために大々的に浪人を募集しているのだという。
「おかげで、清正どのご自身が自らの家臣団を指してうろんな者ばかりだ、とぼやくほどだからな」
うろんな者とは、疑わしい、不誠実なやつという意味である。おそらくこの当時、数多くあった大名家の中で加藤家は、もっとも質の悪い家臣団であったことだろう。

逆にいえば、そんな急造の寄せ集め家臣団をまとめ上げている清正の力量は、並ではないということだ。

「ただ新参の俺が紹介するよりも、もっと上の者を介したほうがいいだろうな」

「山岡道阿弥か？」

「いや、どうも殿と山岡殿は相性がよろしくないらしい。それよりもいいやつを引き合わせてやろう」

そういって大木兼能は、若い男を連れてきた。

「飯田角兵衛直景殿だ。この飯田殿はな。清正どのの幼馴染で、加藤家三傑の筆頭だ。加藤家きっての武闘派として、関白殿からは日本槍柱七本の一本と称されたほどだぞ」

日本槍柱七本とは、豊臣秀吉がお気に入りの大名家の陪臣たちに箔を付けようと選抜したものである。

勝成としては皮肉の一つも言いたくなる人選だ。しかし、そのまえに紹介された当の本人が、盛大に照れてみせた。

「よしてくださいよ。お二方のような本当の武辺者に言われると居心地が悪くて仕方がない。私は武士をやっていることすら不本意なのですから。私は戦が怖いんですよ。戦が終わるといつも今度こそ武士をやめると決意するのに、そのたびに清正のやつに煽てられて、

騙されてイヤイヤ付き合っているうちに、いつのまにかこんな大それた身分になってしまった」

「……。ふざけた野郎だな」

あまりといえばあまりにあけすけな物言いに、勝成は毒気を抜かれてしまった。

この「清正に騙された」とぼやくのは、直景の十八番だったようである。

武士らしくない武士であっても、清正が右腕と頼む男だ。決して無能ではない。特に土木事業では傑出した業績を残している。

後世、加藤清正は、普請の天才のように語られるが、それはたまたま普請の天才である家臣を二人抱えていたからに過ぎない、といううがった論評もある。その天才の一人がこの飯田直景だ。

「水野殿の噂は山岡殿をはじめさまざまな人から聞いて知っていますよ。加藤家は慢性的な人手不足でしてね。どんな方でも大歓迎だ。まして、水野殿ほどの有為の人材を断る理由などあるはずがありません。清正に紹介します。ついてきてください」

かくして大広間に通された勝成は、加藤清正と対面した。

「おことの名は仄聞(そくぶん)しておる」

勝成は二十六歳、清正は二十八歳の日のことである。

顔には武者髭を蓄えた清正は、厳格な小西行長とは逆に、気さくな人柄のようであった。
「摂津がそちを捨てたのなら、俺のところにとどまるがよい」
「思い違いをされては困る。摂津に捨てられたのではない。それがしのほうで、摂津を捨てたのでござる」
むっとした勝成の口答えをきいた清正は瞬きをし、ついで豪快に笑った。
「わっはっはっ……面白いやつだ。千石でよいな」
「御意……」
豪快に笑って見せている清正の顔を鋭く睨みながら、勝成は低い声で応じた。

※

「俺はどうにも、ここの家風が好きになれねぇ」
与えられた屋敷に帰った勝成は、大の字に寝転んだ。
仕官してすぐに、本能的に加藤清正という男とは、肌が合わないことを感じた。
「なにが不満なんです。豪放磊落、大将とは気が合いそうな御仁じゃありませんか？」
不思議そうに質問してくる庵原助右衛門に、勝成は投げやりに応じた。
「ばーか。一見、豪放磊落な人となりにみえるが、見かけ通りの猛将といった単純な人物ではないぞ。むしろ、それは表面的なことに過ぎず、内実はすこぶる計算高い人となりだ」

加藤清正とは、豊臣秀吉の子飼いとして純粋培養された人物だ。よくも悪くも秀吉の影響を色濃く受けている。

秀吉を心より尊敬している清正は、秀吉のためなら火のなか水のなかと考える忠誠心の塊ではない。秀吉のようになりたいと思考法や知恵を真似ているのだ。つまりかつての秀吉が、信長に抱いていた尊敬や忠誠と同じである。

秀吉の政治手法を継承している清正は、部下を煽てて使うことが上手い一方で、腹のうちとはまったく違う外面を演技できた。言っていることと、やっていることがまるで矛盾していても、恥じることのない陰険な人となりなのだ。

また、土木事業を積極的に行ったが、そのために農民を酷使し、一揆が多かったことも秀吉そっくりである。

秀吉と徹底的に肌が合わないことを感じた勝成が、その縮小再生産というべき存在と肌が合うはずもない。

志岐・天草一揆のとき、志岐城救援にきた天草種元（たねもと）の軍勢を加藤清正の軍勢が撃退した。これは立派な戦功である。

しかし、虚勢癖のある清正は、この戦で自ら奮闘して、十文字槍が欠けて片鎌槍となったと主張した。

勝成にいわせると、刃の欠けた槍を使う武士がいてたまるか、ということになる。

清正の片鎌槍伝説は、のちに朝鮮の役で、虎退治をしたおり、虎に片鎌を食い千切られたということにまで発展した。

顔には武者髭を蓄え、高い兜をかぶり、体高六尺三寸（約百九十センチ）という巨大な愛馬「帝釈栗毛」に跨り、勇壮ないわくのある片鎌槍を持ち歩く。

一見、猛将にみえるが、それはハッタリであることを勝成は見抜いた。

実際の清正は、刀も槍も満足に使えない。

秀吉の薫陶よろしきをえた武将であるから、個人的な武道武芸を磨く必要性を感じなかったのだろう。小西行長が剣術の達人であったことを考えると、本当になにからなにまで対称的な人となりである。

それどころか内臓が弱く、雪隠（せっちん）から家臣に命令を出すこともしばしばだという。

母親の影響から、熱心な日蓮宗徒で厳格な家法や軍法を制定して、家中の者に規律を求めた。

生活は質素で、極度に潔癖症であり、なんと三十センチの足駄を履いて用を足したといわれている。

さらに士卒が酒を飲むことを嫌ったので、加藤家では下々のものは上戸であっても隠さ

ねばならなかった。

「なるほど、これがしわき（ケチ、計算高い）人か」

加藤家中のことを知れば知るほど、勝成は呆れてしまった。

この当時の大名は、農民兵を戦場に連れていくとき、武具を貸し与えるのが普通である。清正ももちろん、そうしていたが、加藤家では具足を廃した。

これを知ったとき勝成は怒りを覚えたものである。

「ただでさえ死傷率の高い農兵たちの生命を守る数少ない武具の経費を削るとはなにごとか！」

鉄砲戦が主流となった今、具足など無用の長物というのが清正の主張だ。

たしかに鉄砲は普及していたが、まだまだ白兵戦で首を取ってなんぼの時代である。

具足を廃した代わりに加藤家では、鉄砲隊が重視された。

奥州の伊達政宗（だてまさむね）軍に、騎馬鉄砲隊がいたことは有名だが、加藤清正も「一尺鉄砲」を、「馬上鉄砲」として騎馬武者に持つように命じている。

ただし、いわゆる西洋でいうところの「竜騎兵（ドラグーン）」とは違って、あくまでも、指揮用だ。戦場では大声で叫ぶよりも、銃の合図のほうが使えると判断したのだ。

このように清正は、猛将ではなく、知将としてみれば、合理主義者で、理財家で、この

時代では、画期的なほど有能な人物なのである。

つまるところ豪快な猛将を自演する知将なのだ。

とはいえ、勝成のような根っからの戦人からみると、武辺者を装う知将という存在に、強烈な嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

「そうですなぁ」

相槌を打つ庵原助右衛門は、のちに「庵原助右衛門物語」という覚書を残した。その中に清正評がある。

「清正は奇妙な大将だったけれども、本当に意気盛んな方ではあった」

というのだ。

のちの朝鮮の役のときに、助右衛門は清正の行軍を見かけたのだそうだ。

敵の襲撃など考えられない安全な場所でも、清正は決して配下の兵士たちに油断させようとはしなかったことに感心したのである。

いずれにせよ、助右衛門が清正の器量を見直したのは後年のことだ。

勝成とその一党は、加藤家での生活を鬱々として楽しまず、さていつどうやって出奔してやろうか、と早くも考え始めていた。

※

なんとも初々しい反応に苦笑しながら勝成は、酒を呷りつつ投げやりに命じる。
「さすりな」
「こ、こう？」
戸惑いながらも菖蒲は、両手で掴んだ肉棒を上下に扱(しご)く。
「今度は先っぽを舐めな」
「はぁ？　ここってあんたが小水を出すところでしょ。そんなところを……」
「別に変なことじゃない。世の女はみんなやっていることだ」
潔癖な女は、男女間のことをよく知らないらしく、戸惑った顔で確認してくる。
「そ、そうなの？」
「ああ、あの竜子姫だってやったことだぜ」
「わ、わかったわよ」
年上の男の口車に乗せられてしまった菖蒲は、一度、勝成の顔を睨んだあと、上体を前かがみにして逸物に口を近づけた。
そして、薄い口唇を開き、震える桃色の舌を出す。
ペロリ。
鈴割れを舐めた。

ペロリペロリペロリ……。
上目遣いに勝成の顔をみながら、菖蒲は真面目な顔をして舌を動かしている。
「頭から咥えちまえ。そして、ジュルジュル啜るんだ」
「くっ、……調子に乗って」
屈辱に顔を引きつらせながらも、毒を食らわば皿までといった心境だろうか。菖蒲は素直に亀頭部を咥えた。
ジュルジュルジュル……。
「ただ啜るだけじゃなく、頭を上下させな」
「ふぅ、ふぅ、ふぅ……」
口が塞がっているため、鼻で息をしている菖蒲は命じられるがままに、頭を上下させた。おかげで髷が揺れている。
(こいつに逸物を加えさせていると、まるで衆道でもやっているみてぇだな)
男装の女に口取りさせるのは、なかなか倒錯した気分にさせられる。
「ふぅ……、ふぅ……、ふぅ……」
鼻息を荒くしている菖蒲の頬が、紅潮してきていた。
どうやら、憎い男の逸物でも咥えているうちに興奮してきたようだ。

男性器を咥えているという精神的な興奮だけではない。女は口の中にも性感帯があるらしく、逸物を咥えているとそれだけで発情してきてしまうのだ。

袴に覆われた尻がクネクネと動いている。

（ああ、こいつなんだかんだいいながら、発情しちまっているな）

男装の麗人であろうと、生身の女だ。性欲を覚えないはずがない。健康な体ならばなおさらだろう。

すでに一度、やられているのだ。自分から股を開くつもりはないが、またやられても仕方がない、という諦めが見て取れる。

（こういう心理状態の女を押し倒しても面白くないか）

と判断した勝成は、菖蒲の口元から逸物を取り上げた。

「もういいぞ」

「っ⁉」

憎い男の逸物を無理やり咥えさせられているという自己陶酔に浸っていた女は、戸惑った顔をあげる。

「おまえ下手糞だな」

「仕方ないでしょ。初めてなんだから」

頬を紅潮させた菖蒲は、女としての矜持を傷つけられたかのような不満顔をしている。
「おまえの口取りじゃいつまでたってもおわらねぇぜ。仕方ねぇから下の口を使いな」
「し、下の口って、なっ⁉ なんでわたしが……」
顔を真っ赤にした菖蒲は、両手で袴の上から股間を押さえる。
「おまえの上の口は最低だが、下の口は上物だからな。そっちなら俺も満足できる。俺に借りを作りたくないんだろ」
「……。わかったわよ」
上物呼ばわりされて悪い気はしなかったようで、菖蒲はしぶしぶながら袴を脱いだ。
褌はしていなかった。代わりに女用の下着である腰巻はつけている。
男のように筒がないから、小用をするときに褌では手間なのだろう。
ちなみに中世日本の女性は、高貴な身分であっても当たり前に立ちションをしていた、という記録が残っている。
腰帯が解けたことで、小袖の前が開く。胸元はサラシできつく締められていた。
勝成の郎党として、男に化けているのだ。気を使っているのだろう。
「こ、こうすればいいの？」
戸惑い顔の菖蒲はガニ股開きで、勝成の腰の上に乗った。

内腿が濡れ輝いていることは、指摘しないでおいてやる。
「ああ、そのまま腰を下ろしな」
「こ、こう……。あん！」
菖蒲が腰を下ろすと、肉棒が肉裂の表面をズルリと滑った。
「逸物を手で押さえないと、入らないぜ」
「ああ、なぜわたしがこんなことを……」
文句をいいながらも菖蒲は、右手で肉棒を押さえると自らの肉穴にあてがった。そして、改めて腰を下ろす。
ズブリ……！
すでに通じてしまっている女の肉門は、肉棒を難なく飲み込んでいった。
濡れたザラザラの襞肉に、肉棒がみっちりと密着する。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
二度目であるし、まだ違和感があるのだろう。男の腰の上に跨った菖蒲は大きく口を開けて呼吸をしている。
「気持ちよさそうだな」
「き、気持ちよくなんか、ない！」

「そうか？　なら、そのまま腰を前後に素早く動かしてみな」
勝成が軽く尻を叩いて促すと、憎々しげな表情を作りながらも、菖蒲は腰を上下に動かそうとする。
しかし、腰がプルプル震えていて、上手く動かせないようだ。
「む、無理よ。足腰に力が入らない……」
「前後に動かせばいいんだよ」
「こ、こう……あん」
腰を前後に動かすことは問題なくできたようだ。男の腰の上でM字開脚になっている女武者は腰をリズミカルに動かした。
「はぁん、な、なに、これ、奥にぴとっとついて、ゴリゴリすると、ひぃ！　だ、ダメ、こんな……あん、あん、あん」
騎乗位だと女は好きに腰を動かせるだけに、自分で勝手に気持ちいい場所を見つけてしまう。
まして、肉体的な快感に慣れていない女だけに、初めて体験する肉体的な喜びから逃れられなくなってしまった。
憎い男の逸物で感じてなるものか、という心の叫びとは裏腹に、肉体の快楽に負けてし

まって腰を止められなくなってしまっているさまが見て取れる。
気位の高い女武者が、快感を貪っていることを男に知られるのがイヤで、恐る恐る腰を使っている姿はなかなかに見ごたえがあった。
「くっくっくっ……ずいぶんと憎い男のちんぽが気に入ったようだな」
「べ、別に気に入ってなんかいないわよ、こんなの……わたしがこんな最低男のちんぽごときに……負けることなどあり得ん」
「なら、腰を止めてみな」
嘲笑まじりの勝成の指示に従って、菖蒲は腰の動きを止めようとした。
「あん、ウソ、と、止まらない。腰が止まらない」
菖蒲は恥辱と羞恥に、顔を真っ赤にして涙目になりながら、逞(たくま)しい腰を振るう。
若く健康な女が、男を咥えた状態で高まった情欲を中断するなどということは不可能であろう。
「まったく、男の上で腰を振るうのが好きだなんて、淫乱な女だぜ」
「くっ！」
腰の動きを止められない菖蒲であったが、せめてもの抵抗といったようすで、必死に表情を引き締めて睨んでくる。

「え、ええ……？」
混乱しているお登久の耳元で、勝成は囁く。
「おまえの新鉢、割るぞ」
「え、えええ!?　そ、それってまぐわいってことですか？」
「そうだ」
お登久は首を左右に振った。
「だ、ダメです。奥様に悪いですよ」
いまさらのように我に返ったお登久は、勝成の腕から逃げたし、岩の上から川面に落ちた。
ザブン！
しかし、今度は勝成もまた川に飛び込むと、逃げる少女の両手を大岩に押し付ける。
川の深さは、膝丈であった。
「……やめてください、旦那様。お戯れが過ぎます」
「戯れじゃないさ」
勝成は自らの猛り狂っている肉棒を、乙女のぷりっとした尻の谷間に押し込む。
「俺はおまえの中に入りたい。おまえだって、俺のこと好きだろ？」

「それは……はい。わたし、強いお侍さんって好きです。旦那様みたいな殿方の子供が産みたいってずっと思っていました」
「なら、なんの問題もねぇじゃねぇか。俺もおまえのことが好きだ」
口から出まかせをいった勝成は、左を向いたお登久の唇を奪う。
「ああ、旦那様……」
トロンとしたお登久は、勝成の唇を受け入れてしまう。
お登久の尻の谷間に肉棒を押し付けながら、右手で乳房を左手で陰阜を揉んだ勝成は、その舌を存分に堪能した。
やがてお登久が完全にその気になったのを見て取ってから、唇を離す。
「入れるぞ」
「……はい。よろしくお願いします」
無垢なる少女は、悪い大人に騙されて頷いてしまった。
両手で大岩を抱き、男を迎え入れやすいように尻を突き出す。いわゆる碁盤責めといわれる体勢になったのだ。
そんな穢れなき乙女の膣孔に、幾多の女を貫いてきた名槍の切っ先が添えられた。
「息を吐きながら、力を抜くんだ」

「……」
緊張に頬をこわばらせながらも、お登久はこくりと頷く。
そして、お登久の体から余計な力が入っていないところを見澄まして、肉槍で貫く。
ズボリ……!!!
「ああ！」
股間から血飛沫を上げながら貫かれた少女は、顎をあげて盛大に反り返り、まるで獣が屠殺されるような引きつった悲鳴を上げた。
同時にザラザラの襞肉が、肉棒に絡みついてくる。
「い、痛いです」
「新鉢を割ったんだからな。こればかりは仕方ない。大丈夫。すぐに良くなるさ」
露悪的に嘯いた勝成は、破瓜の痛みに涙する乙女の乳房を揉みしだきつつ、腰を叩きつけた。
パン！　パン！　パン！
「あっ、あっ、あっ、あっ」
夏の水辺。河のせせらぎの中、セミの鳴き声に混じって、女の肉体と男の肉体がぶつかりあう音が響く。

お登久の健康的な肉体は、まるで奔馬のような力感に満ちていて、油断していると弾き飛ばされてしまいそうだ。

その活きのいい女体を力ずくで乗りこなす。お珊相手では味わえない躍動感に勝成は夢中になって腰を使った。

「いい肉饅頭だ。キュッキュッとしめやがる。どうだ。まだ痛いか？」

「気持ちよく、なってきました。旦那様のお大事さまはとっても大きくて、あたしお腹の中がいっぱいで、はぁう、とっても気持ちいいです」

年若いお登久の処女膜は柔らかかったということだろう。破瓜の痛みはたちまち霧散して、牝としての喜びが体を支配しているようだ。

とはいえ、お珊にかわいがられているお登久としては、その旦那様にやられることに罪悪感を覚えるのだろう。

当初はせめて感じないようにしようと努力しているようだが、十代の乙女盛りの健康な体である。感度は抜群にいい。まして、相手は幾多の女たちを堕としてきた百戦錬磨の強者である。

純情な小娘が太刀打ちできるような相手ではなかった。お登久は大岩にしがみつき、トロトロになってしまう。

「ああ、お腹の中をズボズボされるの気持ちいい♪　奥をズンズン突かれるの気持ちいい♪　あぁ、旦那様のお大事、とっても気持ちいい♪　気持ちいい♪　気持ちいい♪」
「そろそろ、いくぞ。受け取れ」
若く健康な少女の抱き心地に酔いしれた勝成は、欲望のままに純潔を散らしたばかりの少女の体内に激情のすべてを注ぎ込んだ。
ドビューッ!!!
「ああ～～～♪　いっぱい、いっぱい入ってくるぅ～♪　旦那様の子種。あぁ～赤ちゃん、できちゃいますぅ～♪」
ドクドクと精液を注ぎ込まれる感覚を味わいながら、川に膝まで浸かったお登久は健康的な肉体をS字に反らせて、夏の蒼穹を仰いでいた。
憐れ純真な田舎娘は、敬愛する主人の夫に貞操を奪われてしまったのである。

※

「うぅ……奥様に申し訳ないですぅ」
ことが終わったあとも、勝成は逸物を抜こうとせず、そのまま川の中に腰を下ろし、花崗岩に背を預けていた。
背面座位で繋がったままお登久は、男の胸の中に抱かれながら嘆く。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

あの名作が電子限定で装い新たに配信開始!!

竹内けん
挿絵：金目鯛ぴんく

戦国時代を華々しく駆け抜けた武将、水野勝成の
波乱万丈な生涯を描く
エッチな本格大河小説第一巻！

第1巻

戦国艶武伝
～烈火の抄～